松島は笑ふが如く
一『奥の細道』の一考察

松本 寧 至
松島は笑ふが知く

元禄二年、陰暦三月二十七日、『奥の細道』の旅にいて立った芭蕉が、あこがれの松島に着いたのは、ようやく五月

の九日だった。『松島』と『象潟』はこんどの大旅行の一大目標ともいうべきものだった。出発にあたりて、「松島の

月先心にかゝりて」といよいよ同行者良に触れながら、「予が薪水の労をたすく。このたび松島・象潟の眺めにせん事

を悦び、且は観旅の難をいたはらんと」といっている。

さて、

日既に午にちかし。船をかりて松島にわたる。　　...

 suppressed

抑制こぶりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭、西湖を恥ず。東南より海を入れて、江の中三里、

浙江の潮をた。ふ。島くの数を尽して、敵ものは天を指、ふすもののは波に翅駕。あるは二重にかさなり、三重

に置みて、左にわかれ右につらなる。負るあり抱るあり、児孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉沙風に吹

っても一度の眷恋の地象潟に着いたのは、陰暦六月十六日。十七日には鶴巻寺熊野権現参詣。江上巡覧、十

八日夕刻には酒田に也だ。

江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責。酒田の湊より東北の方、山を越、磯を伝ひ、いろをあみて

其際十里、日影や、かたふく比、沙風真砂を吹上、雨曇暦として島海の山かくる。聞中に嘆作して「雨も又命也」
とせば、雨後の晴色又頼母敷と、蟹の居屋に膝をいれて、雨の晴を待つ。朝天能襲で、朝日花やかに申し出る程
うらむがごとの。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似た。

象渋や雨に西施がねぶの花

江南のもっとも心を尽した二つの歌枕で、両者の描写は相似ており、また対照的でもある。松島は笑ふが如く、象渋は

しかしここふにたれど、松島は扶桑第一好風にして、とされているのだから、松島が第一位であるならば、当然象渋は第

二位になるだろう。だが松島においては、よい洞庭、西湖を恥ず。として、洞庭湖と西湖を並列にして、さらに

いざ象渋に着いてみる。その景観は松島と似ているところはあるが、またはっきりと違うところがあったのだ。

「松島は江の中三里、浙江の潮をた、ふ」に対して、「江の縦横一里ばかり、師松島にかよびて、又異なり。松島は

东海の「松島」の描写のうち美人の顔を稚ふ、について、諸注はすべて蘇東坡の「西湖」の詩を引

ところで、はじめの「松島」の描写のうち「美人の顔を稚ふ」について、諸注はすべて蘇東坡の「西湖」の詩を引

象渋や雨に西施がねぶの花

是のである。象渋は美人のなかかもとくに「寂しさに悲しみ」を加えた西施に譬えられている。
でよいが、洞庭・西湖に恥じないという松島西湖あるいは西施に限定するのはおかしい。西施は「象瀬」に限定さ
れねばなるまい。「寂しさに悲しみ」を加えた美人が西施ならば、「笑ふが如く」は洞庭湖にあたり、「笑ふが如く」は美
人を探さなければならぬ。

現行の諸研究、諸注釈書の類から問題点をあげるべきだが、それは夥しい類にのぼる。そこでいま私は、ごく一般
的に考えたであろう解説的著作を掲げ、まず問題点を指摘し、ついて必要に応じて専門書の説を掲げてゆくこと
にする。

麻生雉氏の『芭蕉物語』はよく読まれたもののようにある。その（中）に松島、象瀬の条りがある。

言い古されたことであるが、松島は扶桑第一の形勝地である。中国の洞庭湖や西湖にくらべても、決して見劣
りがしないに違いない。東南の方から海が入ってこいでいて、湾の中は三里くらいあるだろう。

今度の旅で芭蕉がもっとも期待をかけたのは松島であった。役引の破れつくろい、笠の縁をつけてかえるなど、旅
来て、聞きしに勝る幽遠な風景に接し、いたく心を動かされた。洞庭湖や西湖や浙江の美観想像したり、また
化粧を施した西施の容姿まで思い浮べたり、変化に富む岩の姿や枝ぶりのみことなる松の形を、いろいろに形容し
をみたが、結果造化の天工に対してはどういう名人の筆にも限度がある。人間の需力を懸するより仕方が
なかった。

麻生の文章は「奥の細道」によりながら、平明で、通釈もかね、解説でもあり、鑑賞でもある。

つまりは象洞である。

象洞の風光はどうやたら松島に似ているようであるが、どこか違うところがある、松島は笑っているようで
ある。芭蕉はこんな句を作った。

「象洞の雨や」としたが、それでも象洞全体の景色が浮んでこない。芭蕉はこんな句を作った。

「雨に」改めた。

象洞は雨に西施がねぶの花・芭蕉は象洞の賓客であるが、象洞の風光はどこかのかかっているようである。象洞は
東北の木が雨の日や夜は葉を閉じる。芭蕉は葉を閉じた合歓を見て、眼を閉じて悲しみを加えて、人が心に憂いをいたしているような
象洞は、象洞の風景を象徴しているかのように思える。
松島の景観を歓喜するなかに西施を持ち込み、象潟においても西湖が西施であるとし、違いないわからぬ。

「笑ふ」も「恨む」も同じことになる。

松嶋の名称は「松の緑こまやかに枝葉渋風に云々」とあるように二百六十餘の諸島に松樹の奇観があってこそけられた_passed_oba_が、西湖すなわち西施にたとえただけでおわるものではない。

松嶋・象潟にわたる同じ出典注記は、もちろん「日本古典文学大系」にしままったわけではなく、むしろ、伝統のいうか相続とのべきものである。そしてそのもの発端は、名著黄檗庵集の一文細道著抄より以下著抄」と略称する。であろうか。

「芭蕉、おくのほそ道」の岩波文庫では、「松島の到来、粟の倉庫に注して奥深く物静かな美しさ」として、著抄を參考せよとす。そして付録の著抄には、西子氏、西施氏、越王勾践に臣を犯すことが、呉王夫差に贈りシ美人ノ名なり。淡粧淡涡ハ、ウスカヘビ、コグクハフヲ云。
やりしているさま、とある。文献の用例には「猶懐然」とあるから、これも西施を連想するのでは無理もない。しか
し元来「猶」は、くぼんだ目の意味である。松島は「猶」までもなく渋で、二百数十の島々が点在している。まさしく
くぼんだ目のさまである。これはまだ見ぬ象渦においても同様であるはずだ。それが美人の形容となると、内面の美
しさまでをいったようにもとれる。松島に対してはしかに「懐然」はあたらない。

ならに、『芭蕉自筆草稿本』では、まず、「懐然」とし、あとで上から貼紙をして「猶然」としている。ただしこ
れは表現に迷いが生じたというより、「猶」字をすぐに思い出しなかったためであろう。さきにもいったように、松
島は笑ぶが如く、象渦は懐むがことし」とある。「松島」の「懐然」は「懐然」の意ではない。むしろここでは同じよ
うに使われる「懐然」が当てられよう。萱蕉抄ではさらに「象渦」における「懐然」の注を参照するよう
にっている。

象渦や雨に西施がねぶの花

此句に、西施のたちはは、前にくわしくるす。又尺讀雙魚、見道旁雨中花、彷彿湘娥面上啼痕、ト。亦

右は「象渦」にはふさわしいものであるが、「前にくわしくるす」では、「松島」も「象渦」も区別がないでは
ないか。麻生は、別著では、

うらむごことし。「うらむ」は、陰気で物淋しいさまをいう。松島は明るい感じだが、象渦は暗い感じだとい
うのである。それは太平洋岸と日本海岸との相違でもあったし、訪ねた日の晴雨にも関係していた。松島にくら
ここでは相対するものの性格をとらえている。それならばなぜどちらも西施のえたか、はいましばり
く排して、「うらむかごことし」と、明るい太平洋岸と日本海岸との相違もあるだろうが、「美人の顔を軽ふ」とい
うのに「男性的」はどうかと思うが、この説明はやや「呪の細道評釈」を含むともあるだろうが、[(美人の顔を軽ふ)と
いていない、「男性的」といったほうが好意的解すれば、「松島」は「象潟」にくらべて「男っぽい」というのであろ
うか。

西施は越の美女である。越王勾践が俄縁山に敗れたとき、忠臣范蠡が越王に贈り、越王から呉王不差に献じられた
女性である。春秋時代、呉と越はたえず争っていた。呉王闘間は越王勾践に敗れて負傷し、呉差に復讐を誓わせ
死んだ。夫差は常に顔に臥して怒を報じることを忘れまいとし、ついに越王を敗
まよいとし、「臥薪嘗胆」の成句の所以である。西施は心を患っていた。

「臥薪嘗胆」の成句の所以である。胸をおさえて顔を絞るさまが、また美しかった。そこで里の醜女たちは美人に見せよう
ときそって顔を絞めた。いわゆる「西施が臥に懸う」の成句の由来である。単に、「懸に懸う」ともいい、「臥」と
他者の物真似をして物笑いになることにいう。またこのことから他人にみならすことを謙遜していうにも使う。美人
西施を讃愛して政治をかえりみなくなった夫差は越に敗れた。勾践はかくて、会稽の辱を雪いた。これも成句になっ
松島は笑ふが知く

林集

【夏之部】に

象潟の雨や西施が合欽の花

松島は笑ふがごのこと象潟は眠るが如しと、扶桑第一の好風にして、造化の天工狩野も筆を捨てたるべし。美人の笑める如しと雨を带びたる梨花によそへて、発句としては、これで行なわれていたのである。ならに玄宗皇帝、楊貴妃の悲恋を謳った『長恨歌』を念頭にいっているのである。

【海集】はさきに松尾氏がいっていたように、楊貴妃にまつわる伝承である。【象潟】の句は、楊貴妃伝承の

下学集

は室町時代から行なわれていた代表的辞書で、元和頃には刊本があり、江戸中期まで行なわれていた。
海落の眠れる花の如く

“翠翆金雀玉搔頭”ことで、かざしの花もうつるふや、枕波の斜紅の世に類ひなき姿か。げにや春雨の風に隨ふ

“翠翆金雀玉搔頭”は、矢倉が顔に遺って紅の斜の条をつけていたというから、これは死だかでないが、いまわれわれが目にするものには戻っていない。しかも、さきのようには“陳情”にとられ、『下学集』にも簡単にながらあるということはそれなりの典拠があったはずである。

海落睡未足は、出典は『唐書』『楊貴妃伝』とする。しかし『唐書』は、楊貴妃にあっては出てこないところである。芭蕉が『唐書』をみたか、これは死だかでないが、いまわれわれが目にするものには戻っていない。しかも、さきのようには“陳情”にとられ、『下学集』にも簡単にながらあるということはそれなりの典拠があったはずである。

海落睡未足は、出典は『唐書』『楊貴妃伝』とする。しかし『唐書』は、楊貴妃にあっては出てこないところである。芭蕉が『唐書』をみたか、これは死だかでないが、いまわれわれが目にするものには戻っていない。しかも、さきのようには“陳情”にとられ、『下学集』にも簡単にながらあるということはそれなりの典拠があったはずである。

“翠翆金雀玉搔頭”は、矢倉が顔に遺って紅の斜の条をつけていたというから、これは死だかでないが、いまわれわれが目にするものには戻っていない。しかも、さきのようには“陳情”にとられ、『下学集』にも簡単にながらあるということはそれなりの典拠があったはずである。

海落睡未足は、出典は『唐書』『楊貴妃伝』とする。しかし『唐書』は、楊貴妃にあっては出てこないところである。芭蕉が『唐書』をみたか、これは死だかでないが、いまわれわれが目にするものには戻っていない。しかも、さきのようには“陳情”にとられ、『下学集』にも簡単にながらあるということはそれなりの典拠があったはずである。

海落睡未足は、出典は『唐書』『楊貴妃伝』とする。しかし『唐書』は、楊貴妃にあっては出てこないところである。芭蕉が『唐書』をみたか、これは死だかでないが、いまわれわれが目にするものには戻っていない。しかも、さきのようには“陳情”にとられ、『下学集』にも簡単にながらあるということはそれなりの典拠があったはずである。

海落睡未足は、出典は『唐書』『楊貴妃伝』とする。しかし『唐書』は、楊貴妃にあっては出てこないところである。芭蕉が『唐書』をみたか、これは死だかでないが、いまわれわれが目にするものには戻っていない。しかも、さきのようには“陳情”にとられ、『下学集』にも簡単にながらあるということはそれなりの典拠があったはずです。
松島は笑ふが如く

のだが、ともかく『佩文韻府』にはその引用として「明皇」を「上皇」とするなど若干異同があるが、ともかく本文が出てはいる。だが『佩文韻府』はいうまでもなく、芭蕉以降もののであるから、これに拠る由もない。芭蕉以前からもとこ薄まれていたのは、『古文真宝前後集』であったから、これに載っていれば、都合がよいのだ。

だが、『定惠院海棠』の詩はある。蘇子瞻『蘇東坡』である。その一節には、「花睡足」とあり、『春睡足』は「諷解大成」に「暗に貴妃（楊太真）のことをいっているだ」と。そして指すところは『唐書』の『楊貴妃伝』であるとする。『唐書』からは検出できなかったわけであるが、蘇東坡が比定しているのではなかろうか。

楊妃外伝載明皇登沈香亭召太真時太真卯酉醉未寢侍兒扶而至明皇曰是豊妃子醉邪海棠睡未足耶。

また『詳考』奥編道に諸説紹介の項があり、『道解』詩とは、明皇召貴妃、被酒新起、帝曰、此海棠睡不一足耶。

『奥のほそ道解』『地』には海棠を当季の花候としたという説をあげている。『詩話』が、明の楊慎撰だとするとい、これも可能性はある。
なお芭蕉以後のものではあるが、『馬嵬志』では『海棠紅妝』、『海棠花睡』の項があり、上は『冷鸯夜話』を出典として、

下は『野客叢書』をあげる。

また、『詳考・奥細道』には、『小林・評釈』を引いて、

長恨歌、雲髪艶、偏新睡覚

をあげている。『小林・評釈』は小林一郎『奥の細道』『評釈』である。

いま、私は浅学菲才を恥じるばかりだが、とにかく当行なわれていて、人口に営炎していた文句であり、『評林』集にも、『長恨歌』を掲げていたのが、参考となるであろう。識者のさらなる御髪髪を仰ぎたいが、とにかく、松島は笑ふが如く、楊貴妃に擬したものがであり、さきにいったように『象潟や』の句も、楊貴妃伝承を裏返したかた

とあり、ここにも『笑ふが如く』に相当するかと思われる『一笑』がある。『長恨歌』が念頭にあっただろう。

只有名花苦幽独。嫣然一笑竹篱間。

（名花の苦しみがただ幽独なるのみ有りて、嫣然として一笑す竹築の間）

（さきにもいったように西施は心を患って、顔を顔め、胸に手をあてるくなせがあったといわれる。(saしkaにいたってはかたに) さきにいった細腰だっ

たと思う。）
したがって、太平洋岸は明るく男性的であるというのも、というなら美人の形容をしてまんざら不当だというこ
とはならない。唐代の女性は馬に乗ったり、狩猟やボロをしたように、かなり活動的な面があり、この場合
もした。武装した婦人の俑が造られていたのは、当時の流行を示したものであろう。
楊貴妃は、その最期はともかく、明るく闊達な女性だったようである。歌舞、音楽に秀でたのみならず、乗馬も得
意だった。宋代の模写だといわれるが、玄宗とポロに興ずる楊貴妃の画巻がある。ボロはいうまでもなくベルシャ起
源の騎乗球技である。当時のルールはよく分からないが、現代のものは四人ずつ二組に分かれ、一個の木製の軸を馬上か
ら長柄の槌で相手側のゴールへ打込にあって勝負をあらそうので、画巻は男女混じって激しく競い合っている場面
である。

西湖が西湖なら、洞庭湖が楊貴妃に相当するはずである。西湖は小さい湖であり、洞庭湖は宏大である。比されて
もよさそうだが、まだ、その例を見出し得ない。

芭蕉は「奥の細道」の旅のあと、相生庵に住むが、「相生庵記」には、
魂美楚東南にはしり、身瀬瀬陳庭に立つ。

という文章もある。これは日本随一の琵琶湖を望んでいったもので、当然ともいえる比喩で特に楊貴妃を連想しては
いないが、なお検討したい。

芭蕉が「さび」の詩人であったから、濃厚豊満な美人楊貴妃よりも、楚々とした西施にひかれたかも知れないが、
後世の某相當者たちはその精神を汲んでか、西施一辺倒ともいうべき解釈をしている。「象潟や」の句がよく出来ており、
はっきり「西施」が出て来るからであるが、実は「ねぶの花」もすでに指摘されているように「海棠の睡」の言い
換えであったかに思える。「海棠」ならば春の季語であり、「ねぶの花」は夏の季語である。晚夏である。
私はこの小稿において、「鷹はうらむがことし」が西施なら、その対照となる「松島は笑うが如く」とは楊貴妃のイ

注

本稿引用本文は著者原稿本文を転載した叢書『萩野一郎校注・岩波文庫』に当たり、原稿の細道をつけて記述する。本稿引用本文は著者原稿本文を転載した叢書『岩波文庫』に当たり、原稿の細道をつけて記述する。
略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類

略説

「お茶の種類」とは、お茶の種類・一概の種類